

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、 バルザックの初期作品にいかに受け継がれたか

宮 川 知 子

はじめに

本稿においては、ブリヤ＝サヴァラン *Physiologie du goût* 『味覚の生理学』⁽¹⁾ (1825) において提示された食や性のモチーフが、バルザックの初期作品、具体的には『結婚の生理学』(1829)、「新しい朝食の理論」« Nouvelle Théorie du déjeuner » (1830)、「ブリヤ＝サヴァランの余白に」« En marge de Brillat-Savarin » (「ブリヤ＝サヴァランと生殖における食事について」« Sur Brillat-Savarin et De l'alimentation dans la génération ») (1838?)⁽²⁾において、どのように発展し、また展開されたのかについて追う。また一時は全集に組み入れられたものの、近年ではそれがバルザックの手によるものなのかどうかの評価が定まっていない「ガストロノミクな生理学」« Physiologie gastronomique » (1830) についてもサヴァランとのかかわりの中で言及したい。

まず、ブリヤ＝サヴァランとバルザックの初期作品との関係に注目し、その影響関係の指摘される『味覚の生理学』(1825)とバルザックの『結婚の生理学』(1829)に加えて、『味覚の生理学』(1825)の中の「食卓の快楽について」における「長い食事の話」と「新しい朝食の理論」(1830)との比較を行う。つぎに、草稿として残る「ブリヤ＝サヴァランの余白に」« En marge de Brillat-Savarin »において、バルザックがサヴァランによる「第一に挙げられる重要な発見」と褒め称えた「第六の感覚、すなわち生殖感覚」ジェネジック *génésique* についての両者の考えを明らかにしたい。

サヴァランは、その著作『味覚の生理学』をものすに当たり、「感覚について」という項から

(1) BRILLAT-SAVARIN, *Physiologie du goût*, présentation de Jean-François Revel, Champs classiques, Flammarion, 1982. 以下、P. G. と略記する。

(2) Rose Fortassier, « Sur Brillat-Savarin et De l'alimentation dans la génération », *L'année balzacienne*, 1968, p. 105-119. によって、その存在が明らかとなったこの草稿は、Jean Ducourneau により『村の司祭』の裏に書かれた欠けていた部分が見つけれ (« En marge de Brillat-Savarin », *Œuvres complètes de M. de Balzac*, Tome XXVI, Les Bibliophiles de l'Originale, 1976, p. 101-106.) 執筆が1838年頃であることが特定された。また Pierre-Georges Castex は、この草稿は、もともとはシャルパンティエより依頼された『味覚の生理学』のための序であり、バルザックはそれを使用せず、『近代興奮剤考』に発展したのだと述べている。(Pierre-Georges Castex, « Balzac et Brillat-Savarin. Sur une préface à la *Physiologie du goût* », *L'année balzacienne*, 1979, p. 7-14).

始め、その中で五感に加えて、第六の感覚としてジェネジック *génésique* を加えるべきだと主張している。サヴァランにとってのジェネジック *génésique* とバルザックの考えるジェネジック *génésique* とを比較し、その食との関係、またそれがバルザックの作品の中でどのように発展していったのかについて考えたい。

I. 『味覚の生理学』と『結婚の生理学』—タイトルと形式の類似

ブリヤ＝サヴァランは、法曹の仕事の傍ら書き溜めていた食に関する考察を一冊の書籍にまとめ、死の直前の1825年に出版した。『味覚の生理学』として知られるその作品は大きな成功を収め、サヴァランの死後、現代に至るまで幾多の版が出版されている⁽³⁾。バルザックは、ブリヤ＝サヴァランの『味覚の生理学』（1825）の出版の四年後の1829年に『結婚の生理学』を出版した⁽⁴⁾。『結婚の生理学』は、そもそもは *code*（法典）ものとして著され、別の題で出版される予定であったものが、そのタイトルをサヴァランの『味覚の生理学』にちなみ、大幅な加筆修正を経て出版されたという経緯を持つ⁽⁵⁾。バルザックによる、発行人の Lavavas seur に宛てた手紙によれば、この修正は非常に短期間で行われた。この手紙には、「私は、洒落を効かせたものを書きたいと思っていたのに、ある朝、あなたがやってきて、ブリヤ＝サヴァランが十年かけて成し遂げたことを三ヶ月ですよう求めてきました。彼が扱ったのは酔っ払いのたわ言に過ぎませんが、私が取り扱っているのはフランスで最も真面目な主題です。彼の主題は新しく、私のものは、最も使い古されたものののです⁽⁶⁾」。この酔っ払いのたわ言 (*godailleries*) という言葉は、*godailler* という動詞から派生した言葉で、アカデミーの辞書（1762, 1798, 1835）によれば、この動詞は「過剰に何度も飲む」との意味がある⁽⁷⁾。このバルザックの手紙のトーンからも、当時、純粋に文学を志すものにとって、食を書物の主題とすることは非常に卑俗なことであり軽蔑を誘うようなものであったことがわかる。しかしバルザックは、それでもサヴァランの扱った主題を「新しい」

(3) 1828年の第二版から1883年までの時点ですでに29点に及ぶ。（中野知律、『ブルーストとの饗宴』、水声社、2020年、p. 424-425.）

(4) Honoré de Balzac, *Physiologie du mariage ou méditations de philosophie éclectique, sur le bonheur et le malheur conjugal, publiées par un jeune célibataire dans La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, 12 volumes, Bibliothèque de la Pléiade, Paris : Gallimard, 1976-1981 ; t XI, p. 1739. 以下、C. H. と略記する。日本語訳は、既訳、安士正夫、古田幸男によるもの（『バルザック全集2「結婚の生理学」』、東京創元社、1961年）を参照し、文脈に応じて訳を改めた。

(5) 『結婚の生理学』については、バルザック自身の出版社で1826年に一度印刷された。サヴァランからの影響と思われる箇所については、ブレイヤードに一覧があるが（C. H., t XI, p. 1766）、本稿においてはそれ以外の箇所を中心に上げる。

(6) C. H., t XI, p. 1743. 拙訳とする。「Je voulais faire une plaisanterie et vous m'êtes venu demander, un matin, de faire en trois mois ce que Brillat-Savarin avait mis dix ans à faire. Il ne parlait que de godailleries et moi je parle de ce qu'il y a de plus sérieux en France. Il avait un sujet neuf et moi le sujet le plus usé.」

(7) *Dictionnaire de l'Académie Française*, Imprimerie et librairie de Firmin Didot frères, Imprimeurs de l'Institut de France, article « godailler », « Boire avec excès & à plusieurs reprises ».

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかにかに受け継がれたかと考えていた。

面識はなかったものの、サヴァランとバルザックの縁は深い。『味覚の生理学』の初版は、ソートレという版元から出版されており、オーギュスト・ソートレは、バルザックのヴァンドームでの学校時代の同窓生であった⁽⁸⁾。また、1835年のMichaudによる *Biographie universelle ancienne et moderne* のBrillat-Savarinの項はバルザックの手によるものである⁽⁹⁾。さらには、1839年にサヴァランの『味覚の生理学』が出版社シャルパンティエから再版された際には、バルザックは序とともに『近代興奮剤考』を付録として収め、真意はともかく、自身の作品を「大御馳走〔『味覚の生理学』〕のあとのデザート」であるとしている⁽¹⁰⁾。

バルザックは、『味覚の生理学』と『結婚の生理学』を対となるものとして出版しようとしたシャルパンティエに『味覚の生理学』の序文を依頼されていた。実際は使用されなかった序文の草稿とされる「ブリヤ＝サヴァランの余白に」« En marge de Brillat-Savarin »をバルザックはこう始めている。「ブリヤ＝サヴァランは、常に才気に富み、優美で、有益な著書—その主題は、長らく軽蔑されてきたものであったが—により、素晴らしくも正当な成功を手にした⁽¹¹⁾」。

先に述べたように、ブリヤ・サヴァランが『味覚の生理学』を出版した1825年においては、食という主題を扱うことは卑俗なこととされ、初版は匿名で出版された。サヴァラン自身も著作中の「著者とその友との対話」において、この書籍の出版を促す友人に対してこう答えている。「だって君、僕はこれでも職業がら相当まじめな研究をしてるつもりなんだが、あんなものが出た日には、世間のやつらは僕の本の標題を見ただけで、「あいつは案外くだらんことばかり詮索してるんだな」なんて、思い込まんとも限らんからね」（中略）「でもね、標題が標題だし、主題も主題だし、それに世間には悪口屋が多いからな⁽¹²⁾」。

『味覚の生理学』の正式なタイトルは、『味覚の生理学、あるいは超絶的美味学の瞑想、文学や科学のもろもろの学会の会員たる一教授からバリの美食家に捧げられた、理論と歴史と日常の間

(8) Dominique Saint-Pierre, *Brillat-Savarin, Œuvres, hors-d'œuvre, chef-d'œuvre*, édition complète et originale établie et annotée par Dominique Saint-Pierre, Cleyriane éditions, 2020, Tome I, p. 281.

(9) *Biographie universelle ancienne et moderne histoire par ordre alphabétique de la vie publique et privée de tous les hommes*, publié sous la direction de MM. Michaud, 1835, tome 59, article « Brillat-Savarin ». バルザックは« Gall »「ガル」の項目の執筆を希望したが、出版社の要望からサヴァランの項目を書くこととなった。(Œuvres complètes de M. de Balzac, Tome XXVI, Les Bibliophilies de l'Originale, 1976, p. 583.)

(10) 山田登世子訳、『風俗研究』、藤原書店、1992, p. 152. (Honoré de Balzac, « Traite des excitants modernes » dans *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, 12 volumes, Bibliothèque de la Pléiade, Paris : Gallimard, 1976-1981 ; t. XII, p. 306).

(11) « En marge de Brillat-Savarin », *Œuvres complètes de M. de Balzac*, Tome XXVI, Les Bibliophilies de l'Originale, 1976, p. 101. 以下、拙訳とする。

(12) 『美味礼讃』上巻, p. 25-26. (P. G., p. 21). 日本語訳は、既訳、関根秀雄、戸部松美によるもの(『美味礼讃』、岩波書店、1967年)を基本とし、必要と思われる箇所にかんして、また文脈に応じて適宜、訳を改めた。また、玉村豊男訳、『美味礼讃』上下巻、中央公論社、2021年)についても確認をした。なお表題については、*Physiologie du goût* をそのまま訳し、『味覚の生理学』とした。

題を含む書』であり、その作者は「一教授」、つまり匿名である。また、その構成についても、生理学としての学術的な記述と作者自身の随想が随所にいり乱れている。

一方、『結婚の生理学』のタイトルは『結婚の生理学、あるいは夫婦の幸福と不幸に関する折衷哲学的瞑想』そして作者は「ある若き独身者」、やはり匿名である⁽¹³⁾。バルザックは、生理学、瞑想（省察）といった単語の配列に到るまで『味覚の生理学』に倣い、加えてアフォリズムの形式も取り入れている⁽¹⁴⁾。

また、『味覚の生理学』には、その内容に入る前に、先に引用した「著者とその友との対話」以外に、「読者へ告ぐ」、「教授のアフォリズム」、「伝記」、「序」が並んでいる。『結婚の生理学』でも、総論の前に長い序説がおかれ、そこには2人の貴婦人を登場させ、夫を持つ妻の恋の情熱、姦淫についての語らいがなされ、筆者の主題が現れる。さらに、そこでは、『味覚の生理学』の「著者とその友との対話」と似たようなやりとりが行われるのである。

「私たちの本はできあがりまして？」と二人の女性協力者の若いほうがたずねた。

「ああ、残念なことにまだです。奥さん、その本が私に対してまきおこしかねない憎しみのつぐないをしてくださいますか？」（中略）

「なんですか？あなたは尻込みなすっていらっしゃるの？その著作を公刊なさいませよ。怖がることなんかありませんわ。…」⁽¹⁵⁾

両者ともに、筆者と友人との対話を通して、書籍の中で記している内容が批判の対象になるのではないかという危惧を表している。サヴァランが現実の事象として、友との対話の中で出版を躊躇する様子を描く一方、バルザックはそのような躊躇を『結婚の生理学』という物語の序章として組み込む。そして「ある若き独身者」は、結婚に対し「誰もが考えていながら、誰も口に出して言わない事柄を蒐集するという役目⁽¹⁶⁾」を負い、「憎しみ」を引き起こすかもしれない書籍を刊行することとなる。バルザックは、サヴァランの味覚という「新しい」主題に対して、結婚という「最も使い古された⁽¹⁷⁾」主題を、誰も口に出して言わないことを表すという「新しさ」に変換する。バルザックはこう続ける。「主題はきわめて重大であるから、筆者はつねにそれを

(13) C. H., t XI, p. 903. 「折衷」 *éclectique* の語については、ヴィクトール・クザンの影響とされる。(C. H., t XI, p. 1773.)

(14) バルザックの30の「省察」は、その「省察」という言葉遣いや「省察」の数に至るまで同じであることから、やはりサヴァランに倣ったのではないかという指摘が「近代興奮剤考」の註でなされている。(C. H., t XII, p. 981).

(15) 『バルザック全集2「結婚の生理学」』, p. 18. (C. H., t XI, p. 911).

(16) 同上, p. 18. (C. H., t XI, p. 911).

(17) 中世文学の『結婚十五の歓び』 (*Les Quinze Joyes de Mariage*, 1400?) などが念頭にあったのかも知れない。

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかにかに受け継がれたか

逸話化しようと試みた。なぜなら、今日、逸話こそあらゆる道徳のパスポートであり、あらゆる書物の覚醒剤だからだ。すべてが分析と観察でうまっている本書では、読者が疲労することも、著者の自戒が顔を出すことも避け難かった。(中略)したがって筆者は、読者に一息入れてもらうようにこの長い「研究」の糸口を按配しておいた。このやり方は、「結婚」について筆者の没頭した仕事にきわめてよく似た仕事を「味覚」についておこなったある作家がたいへん珍重したやり方であり、筆者はこれからもこの作家の言葉を借用して、両者に共通した思想を表現するつもりである。そうすることは、声価を博してのち日を経ずに死なれた先駆者に一種の讃仰を捧げることになるであろう⁽¹⁸⁾」。

以上のように、出版の事情がそうさせたとはいえ、バルザックは『結婚の生理学』においてタイトルと形式をそっくりそのまま受け継いでいる。そして、この序説の最後に、サヴァランの『味覚の生理学』の序からの引用を行っている。本文中で一人称単数の「私」を使用した場合は読者との打ち解けた対話を想定し、我々という一人称複数を使用した場合は服従すべきだと、その出典を明記しながらサヴァランと同じ形で序説を結んでいる。では、この書籍のタイトルとなった『生理学』についてはどうか。バルザックは、それが科学的な事象か否かはともかくとして、事象を「観察」し「分析」することを『生理学』と呼んだ⁽¹⁹⁾。

Ⅱ. 『味覚の生理学』と「新しい朝食の理論」―食のモチーフの類似と対比

『結婚の生理学』が出版された1829年と時を同じくして、新聞『ラ・モード』*La mode* が創刊される。バルザックはこの紙面に多くの文章を寄せたが、なかでも1830年5月の「新しい朝食の理論」*« Nouvelle théorie du déjeuner »* で使用される食のモチーフは、『味覚の生理学』のそれと驚くほどに重なる。

『味覚の生理学』において、サヴァランは、舌の運動を明らかにし、味覚を生理学的に分析する。また、「一つの欲望を満足させたことからくる現実的、直接的な感覚」としての「食べる快楽」

(18) 『バルザック全集2「結婚の生理学」』, p. 18-19. (C. H., t. XI, p. 911-912.) プレイヤードではこの著作に挟み込まれる逸話についてサヴァランから影響を認めるものの、バルザックの逸話についての個人的関心は深く、1827年時点で逸話についての書物を編集していたとしている。(C. H., t. XI, p. 1775.) 一方、松村博史は、バルザックがその手法とタイトルを借りてきたことから、サヴァランを「先駆者」と呼んでいることから、『結婚の生理学』はサヴァランの『味覚の生理学』に負っている、と指摘している。(Hiroshi Matsumura, « La physiologie, la table et la modernité : de Brillat-Savarin au "Père Goriot" », *L'année balzacienne*, 2018, p. 88.)

(19) 鹿島茂は、その訳書『役人の生理学』(新評論, 1987. 筑摩書房, 1997.) の解説において、1840年代の「生理学もの」の流行について触れ、その中で「生理学という言葉が本来の意味から逸脱して使われるようになったのは、1826年に出版された食通のブリヤ＝サヴァランの『味覚の生理学』を持って嚆矢とし、1829年のバルザックがこの意味のずれを定着させた」と述べる。松村博史は、「生理学もの」の流行は1840年頃であり、1829年には『生理学』の語がまだ科学的な意味合いを持っていたことから、バルザックは分析と観察を主とした作品を生み出そうとしていたと考えられると述べている。(Hiroshi Matsumura, *op. cit.*, p. 89.)

と「熟慮から生まれる感覚」、すなわち「食事に伴ういろいろな事情、場所だとか、物だとか、人物だとかから生まれ出る」、「食卓の快樂」を区別した⁽²⁰⁾。省察「食卓の快樂について」の中のスケッチとして語られる、サヴァランが「一生のうちに経験した最も長い食事の話」は、サヴァランが年配の親戚を手作りのフォンデュでもてなした1801年ごろの逸話として、朝10時から始まる長い一日が語られる⁽²¹⁾。つまり、ここでサヴァランの語る「食卓の快樂」は朝食から始まるのである。

彼らは食卓の用意ができているのを見て嬉しそうに微笑した。真っ白なテーブルクロスの上に3人前の食器が整い、それぞれの席の前には、2ダースの牡蠣が金色に光ったレモンとともにおかれている⁽²²⁾。

一方、バルザックにおける朝食とはどのような描かれ方をしているのか。バルザックは、「新しい朝食の理論」(1830)の冒頭で、ここ数年の間に刷新された諸々の制度を並べ、その中に朝食を加える⁽²³⁾。

廃れた制度の中には、朝食も含まれよう。というのも新しいファッショナブルな朝食の原則は、旧来のシステムを完全に破壊するものだから。我々がこの食の流行について個人的な意見を述べるのが許されるならば、この時代が朝食を軽視する態度を大変な不幸だと考えざるを得ない⁽²⁴⁾。

そして、こう続ける。「現在、朝食は単なる先入観に過ぎない。誰が朝食をとるというのか？」⁽²⁵⁾

(20) 『美味礼讃』上巻, p. 238. (P. G., p. 170). 文脈に合わせ訳を改めた。

(21) 『美味礼讃』上巻, p. 245. (P. G., p. 175-176).

(22) 『美味礼讃』上巻, p. 246. (P. G., p. 176).

(23) 1835年のアカデミーの辞書によれば、Déjeunerの意味は、「朝食、または、その食事で食べる料理や食材」とある。「Le repas du matin ; ou les mets, les aliments qu'on mange à ce repas.」(*Le Dictionnaire de l'Académie française*. Sixième Édition. T.I, 1835, article « Déjeuner ».) 松村博史は、「新しい朝食の理論」で描かれる déjeuner の語について、19世紀ラールスを引用し「我々が現在 petit déjeuner (朝食) と呼ぶもの」との説明を加えている。(Hiroshi Matsumura, *op. cit.*, p. 95.)

(24) Honoré de Balzac, « Nouvelle théorie du déjeuner » dans *Les Œuvres diverses*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Bibliothèque de la Pléiade, Paris : Gallimard, 1996 ; t II, p. 763. 以下、O. D. と略記し、以下、拙訳とする。「Au nombre des institutions qui ont péri, nous mettrons le déjeuner, car les principes nouveaux d'après lesquels se rédigent les déjeuners fashionables équivalent à une destruction complète de l'ancien système. S'il nous est permis d'exprimer notre opinion personnelle sur cette mode culinaire, nous n'hésiterons pas à regarder le dédain que le siècle affecte envers le déjeuner comme un grand malheur.」

(25) O. D., t II, p. 764. « En ce moment, le déjeuner n'est plus qu'un préjugé. Qui déjeune ? »

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかに関与したか

さらに、「まず、教会の財政管理者とみなされるのを避けるために、朝食は、テーブルクロスなしで出さねばならない⁽²⁶⁾」と続ける。朝食をとることは古い風習であり、誰も朝食などとらず、ましてや1830年において、テーブルクロスを使用することなどはもってのほかだと告げるのである。先に見た『味覚の生理学』において、「真っ白なテーブルクロス」の上にきれいに揃えられた食器に満足して微笑むサヴァランの親族と対照的である。続いてサヴァランは、来客のためにセットしたテーブルを以下のように描写する。

テーブルの両端にはソーテルヌの葡萄酒が一本ずつ、きれいにぬぐって出している。ただ栓だけは汚れたままで、この酒が作られてから大分なることを示していた⁽²⁷⁾。

悲しいかなこういう牡蠣の朝食は、いまではもうほとんど見られなくなった。(…)私は残念でたまらないが、時は政府をさえ変えるのだから、単なる習慣を変えるくらいのことは当たり前かもしれない。牡蠣は「これはなかなか生きがよい」と言って食べられてしまうと、腎臓の串焼き、トリュフ入りフォワグラが出、そして最後がよいよフォンデュだった⁽²⁸⁾。

サヴァラン自身もこれは1801年頃のことであり『味覚の生理学』を執筆している1825年の時点では、このような朝食はほとんど見られなくなったと記している。

では、これに対しバルザックはどのように1830年の朝食を描いているのだろうか。

テーブルにテーブルクロスをかけることの次に、最も大きな過ちは、テーブルの上にボトルを並べることだ。流行は朝に飲むのは水だけでなければならないと厳格に要求している⁽²⁹⁾。

さらにバルザックは以下のように続ける。

しかし、ワインとは…なんたることだ！健康を理由にしたり、習慣を持ち出したり、胃のことを理由にしないでくれ給え⁽³⁰⁾！

(26) O. D., t II, p. 764. « D'abord, sous peine de passer pour un marguillier, vous devez servir un déjeuner sans nappe. »

(27) 『美味礼讃』上巻, p. 246. (P. G., p. 176).

(28) 『美味礼讃』上巻, p. 246-247. (P. G., p. 176).

(29) O. D., t II, p. 764. « La plus grande faute que l'on puisse commettre, après celle de mettre une nappe sur la table, est d'y laisser paraître une bouteille. La mode exige impérieusement qu'on ne boive que de l'eau le matin. »

(30) O. D., t II, p. 765. « Mais du vin !...fi donc ! N'alléguez pas votre sante, l'habitude ; ne mettez pas votre estomac en avant ! »

18世紀後半から19世紀初頭、ワインは健康に良いものであるとされていた⁽³¹⁾。しかし、バルザックの描く「新しい朝食」においては、水以外の飲み物を朝から体に入れることを否定している。これらの描写はやはり、年代物のソーテルヌワインとともに始まったサヴァランの朝食のもてなしに対比させるように描かれていると言えるだろう。さらにバルザックは、サヴァランが「食卓の快楽について」において親族をもてなした食品とほぼ同じ食品を並べ、それらを完全に否定する。

我々はすでに二つの変わらぬ原則を持っている。テーブルクロスなし、ワインなし、という。[...] 牡蠣を勧めようなどしてはならない！庶民や居酒屋くさいのだ。[...] フォアグラのパテ、シャンパンで煮た腎臓、トリュフづめの脚の料理を出すなんて...それは古くさい木靴を履くようなものだ⁽³²⁾。

バルザックによれば、1830年現在において、当時サヴァランが親族とともにした朝食は、完全に否定されるものとして見なされているのである。19世紀初頭、サヴァランの朝の食卓で歓迎された牡蠣、腎臓、トリュフといった食品は、1830年にバルザックにおいて一つひとつ否定される。ここで登場する牡蠣やトリュフが当時、精力強壮剤としてや催淫作用を持つ食材として認識されていたことにも注意を払う必要があるだろう。

バルザックは、「この時代が朝食を軽視する態度を大変な不幸だと考えざるを得ない」と述べてはいるものの、実際のところ、この、朝食が軽視されていることを本当に憂いているのかは定かではない⁽³³⁾。

ここ一年で、ガストロラトリー（美食の崇拜）はその重要性を大いに失った。我々の時代にふさわしいガストロノミックな革命が起こったのだ。食卓は軽視され始めている。知性の優越性が日々より一層感じられ、また求められるようになっているため、誰もが食事という、体の組織に支えられた日々のたゆまぬ戦いによって、魂の力をどれだけ奪われるのかを理解するようになったのだ⁽³⁴⁾。

(31) Guillaume Buchan, *Médecine Domestique ou Traité complet des moyens de se conserver en santé, de guérir & de prévenir les maladies, par le régime & les remèdes simples, tome I*, Chez G. DESPREZ, Imprimeur ordinaire du Roi, Paris, 1775. p. 17. « ...le bon vin est le médicament le plus actif. »

(32) O. D., t II, p. 766. « Nous avons déjà deux principes invariables : pas de nappes, pas de vin. [...] Ne vous avisez de proposer des huitres !...cela sent le peuple et les cabarets. [...] Donner un pâté de foies gras, des rognons au vin de Champagne, des pieds truffés...autant vaudrait porter des *socques articulés*. »

(33) O. D., t II, p. 1567. « Quant à lui, il joue du pour et du contre sans se prononcer nettement, en définitive, sur le déjeuner moderne. » プレイヤードにおいても、バルザックの朝食についての意見は賛成とも反対とも取れるようであることが指摘されている。

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかに関与したか

ここに「ここ一年で」とあることにも注意を払いたい。バルザックが『味覚の生理学』を真意はどうあれ称賛し、それに非常に似通った形式で『結婚の生理学』を出版したのは、前年の1829年のことであるからである。しかし、この「新しい朝食の理論」においてバルザックは、以前の朝食が廃れた原因として、食事とその消化にかかる消耗から身体から知性や魂の力が減ってしまうという考えを述べる。そして、「*l'ambition mange peu, le savant est sobre, et l'homme à sentiment a l'obésité en horreur*」「野心家は食べない、学者は節制し、感性ある人は肥満を嫌う」と続け、食の悦びに対する軽蔑は、料理を進歩させ、さらに今後は小さな形状に最大級の栄養を詰め込んだ、つまり我々現代人に馴染みの深い、今でいうところのサプリメントのようなもので栄養を摂るようになるのではないかと締めくくるのである⁽³⁵⁾。そこにはもちろんゆったりとした時間の流れはない。

一方、サヴァランの描写した1801年の「長い食事」の中の朝食は、楽しい会話を交えながら、食後のゆるりとした室内の散歩を経て午後2時まで続く。そしてその後、昼食が供される⁽³⁶⁾。このゆったりとした時間の流れ、サヴァランのいうところの「食卓の快楽」は、バルザックの描く朝食においては、「栄養素をスプーン一杯に凝縮させる⁽³⁷⁾」に端的に表されるように、スピードと効率と化していると思われる。サヴァランの経験した朝食とバルザックの描写する朝食とは、時間の流れが全く異なっていることに留意したい。

とはいえ、この「新しい朝食の理論」に使われた細かな食のモチーフは、サヴァランの『味覚の生理学』の中の「一生のうちに経験した最も長い食事の話」へのある意味での応答、サヴァランが示した食のあり方が、時を経て、それを受容する社会においてどのように発展していくのか、というバルザック自身の回答を示しているといえよう。

これまでみてきたように、真意はともかくバルザックはサヴァランの著作を讀み、その形式に倣うように『結婚の生理学』を組み立て直し、加筆を行った。しかしながら、その翌年に発表された「新しい朝食の理論」においては、サヴァランの著作との影響関係は明らかであるものの徐々にその相違点が明らかになってくることとなった。そしてそこには、両者の時間に対する感覚の大きな違いが現れているようにも思われる。サヴァランが10年かけて完成させた（とバル

(34) O. D., t II, p. 767-768. « Depuis un an la gastrolâtrie a perdu beaucoup de son importance. Il s'est fait une révolution gastronomique assez honorable pour notre époque. On commence à mépriser la table. La supériorité de l'intelligence étant de jour en jour plus sentie et plus désirée, chacun a compris tout ce que l'âme perdait de ressort dans ces luttes journalières, soutenues par l'organisme, à propos d'un repas. »

(35) O. D., t II, p. 768.

(36) 『美味礼讃』上巻, p. 248-250. 昼食に続き、お茶やトースト、パンチなどが登場し、「長い食事の一日」は夜の8時過ぎにお開きとなった。(P. G., p. 177-179).

(37) O. D., t II, p. 768. « ...concentrer le principe nutritif dans une cuillerée de soupe. »

ザックが考える)『味覚の生理学』に対し、バルザックは『結婚の生理学』の体裁を3ヶ月で整えた。そのバルザックにとっての「朝食」とは、1830年の時点で、一見その衰退を憂いてはいるものの、やはり断じて、サヴァランがしたように4時間を費やすものではない。松村博史は、バルザックが「モデルニテ」という言葉を導入し、その問題を考察してゆく上で、食のテーマ、その食事の時間の変化やレストランの発展が非常に重要であったことをブリヤ＝サヴァランとバルザックの初期作品との関わりの中で指摘する⁽³⁸⁾。また松村は、バルザックが新しい食卓の変革の動きを最も近くで捉え、それを大革命から始まった19世紀前半の社会変動と結びつけて考えたのだと述べる⁽³⁹⁾。このような目まぐるしい社会変動を若くして体験したバルザックと18世紀を生きたサヴァランの時間感覚は、全く異なったものであったと思われる。

では、サヴァランとバルザックのこのような感覚の違いは、ジェネジック *génésique* の概念においては、どのように表れるのだろうか。

Ⅲ. サヴァランとジェネジック *génésique*

サヴァランの『味覚の生理学』は、瞑想(省察)―「感覚について」から始まる。サヴァラン曰く、人間には一般的な視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触角、の五つの感覚に加えて、六つ目の感覚が存在する。それは、生殖感覚(*génésique*)、あるいは肉体愛(*amour physique*)であり、「両性を相引かさせ、種族を繁栄させることをその目的とする」にもかかわらず「触覚と混同されたり、それに付属させられたりしていた」と述べている⁽⁴⁰⁾。サヴァランはさらにこう続ける。「もしも個の保存を目的とする味覚が一つの感覚にちがいないとすれば、種の保存をその目的とする器官には、なおさらのこと感覚という称号を与えなければならないと思う。だからジェネジック(生殖感覚)にも感覚としての席を与えようではないか。われわれはそれを拒んではならないと思う⁽⁴¹⁾」。浦上祐子は、このジェネジック *génésique* の概念に注目し、ビュフォンの『博物誌』からの影響を論じ、ビュフォンは「キリスト教の抑圧された恥ずべき性」ではない性を語り、「人間の性を自然なものをみなし肯定」し、その「思想はブリヤ＝サヴァランに引き継がれ」たと述べる⁽⁴²⁾。

そもそもジェネジック *génésique* とは何を表すのか。この語はサヴァランの造語であるとされ、*Le Robert Dictionnaire Historique de la Langue Française* によると、この言葉の初出は1825年

(38) 松村は、ブリヤ＝サヴァランの豪華な朝食について触れながらも、サヴァランの記した食事時間の変化や、レストランにかんする記述に注目した。

(39) Hiroshi Matsumura, *op. cit.*, p. 87-100. 松村は、「新しい朝食の理論」の発表された1830年5月が七月革命の直前であったことを指摘している。

(40) 『美味礼讃』上巻, p. 51. (P. G., p. 39).

(41) 『美味礼讃』上巻, p. 52. (P. G., p. 40).

(42) 浦上祐子, 「ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における「味覚」― *génésique* という概念をめぐって―」, 『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』, 第20巻, 2017, p. 40.

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかにか受け継がれたか

であり学術的な用語で性行動を表す⁽⁴³⁾、とあり19世紀ラールスには「生成および生殖機能にかんするもの」と記されている。ラールスは、文例として「トリュフはジェネジックを誘う」(*La truffe dispose aux plaisirs génésiques*)というサヴァランの言葉を引用している。浦上は、*Le Robert Dictionnaire Historique de la Langue Française* の *genèse* の意味を参照し、サヴァランがこのジェネジック *génésique* という言葉を創った理由として、単なる性的な感覚以上の概念、つまり *genèse* 「創造と生成」の意味が込められており、それがサヴァランにとって「生命を創造するのみならず、あらゆる文明・学問・文化を創造し、それによって社会は生成され」るからだと述べている⁽⁴⁴⁾。

サヴァランによれば、人間の原初の感覚は純粹に直接的で、食べ物「味わわずに食い」、性を「荒々しく享受したのだ」が、人類の感覚が熟慮や比較や判断を経て改善され、味覚もジェネジック（生殖感覚）も広く学問の中に広がってゆくこととなった⁽⁴⁵⁾。サヴァランはガストロノミーを一つの学問として考え、ジェネジックもそうあるべきだと捉えたのである。

そして諸感覚の働きの目的として、「種の存続を確保するための個の保存⁽⁴⁶⁾」という、「一方がもう一方の結果となるという2つの目的⁽⁴⁷⁾」を挙げる。サヴァランは『味覚の生理学』の冒頭でジェネジックについて触れ、ジェネジックを味覚より先に記述すべき重要な感覚として捉え

(43) *Le Robert Dictionnaire Historique de la Langue Française Tome II*, sous la direction de Alain Rey, 2000, article « génésique ». この *génésique* の語は、実は医学的な文脈でサヴァランの使用以前にも見られる。『メガラントロボジェネジー (Megalantropogénésie) に関する新しい試み、すなわち才気走る子供を作り、偉大な人間にする技術』といった表題を持つ1803年刊行の書籍のなかに *Megalantropogénésique* の言葉が見られ、これが子供の生成についての造語であることがわかる。(Robert le jeune, *Nouvel essai sur la Megalantropogénésie ou l'art de faire des enfants d'esprit, qui deviennent de grands hommes, suivi des traits physiognomoniques propres à les faire reconnoître, décrits par Aristote, Porta et Lavater*, Second édition, Chez le normant, 1803). 1808年より刊行された複数の医師たちによる年鑑 *Annales de littérature médicale étrangère* 中の1813年のパリの医師からの報告書のなかにも *génésique* の表記が見られる。(MM. Kluyskens, Duber, Vrancken, Rasoli, *Annales de littérature médicale étrangère et Précis des Conférences du Cercle Médical de Paris*, l'imprimerie de P.F. de Goesin-Verhaeghe, Gand, 1809.) 『味覚の生理学』発刊後、1829年刊行のサヴァランの遠縁であった医師ジョセフ・レカミエの筆による癌の治療についての書籍には、感覚の一つとして *génésique* が記載されている。(J. C. A. Récamier, *Recherches sur le traitement du cancer, par la compression méthodique simple ou combinée, et sur l'histoire générale de la même maladie*, Chez Gabon, Libraire-éditeur, Montpellier, 1829.) また、1830年刊行の医学用語辞典においては *génésique* について、レカミエによる言葉として « celui qui précède la génération » 「生成を促すもの」との説明がされている。(Bégin, Boisseau, Jourdan, [et al.], *Dictionnaire des termes de médecine, chirurgie, art vétérinaire, pharmacie, histoire naturelle, botanique, physique, chimie, etc.*, Bechet, Paris, 1830.) さらに、1842年発行の医学辞典には、「五感に加え、サヴァランの定義した第六の感覚として *génésique* が加えられる」という記述が見られる。(Antoine François Hippolyte Fabre, *Dictionnaire des dictionnaires de médecine français et étrangers ou Traité complet de médecine et de chirurgie pratiques*, Société Encyclographique des Sciences Médicales, Bruxelles, 1842.)

(44) 浦上祐子, 前掲論文, p. 45.

(45) 『美味礼讃』上巻, p. 52. (P. G., p. 40).

(46) 『美味礼讃』上巻, p. 59. (P. G., p. 44).

(47) 『美味礼讃』上巻, p. 59. (P. G., p. 44).

ている。浦上は、その理由としてこの「二つの感覚が「種の保存」と「個の保存」という目的において互いに相関しながら存在の根源を確保するだけでなく、これらの最も動物的感觉こそ、動物から最も人間を引き離す、高尚で美的な文明や文化を創造し、それによって人類の特徴をなす知的で洗練された文明社会が生成されるからであった」と述べ、さらにサヴァランの示す味覚の快楽の根拠が、ジェネジックとの比較となっていることを示している⁽⁴⁸⁾。

松永澄夫は、味覚について「人間では、味を味わうそのことの楽しみのためにこそ発揮される場合が圧倒的に多いこと、このことが確認できる。つまり、音を出すものや事象、また色の付いたもの・事象への関心に従属することから解放されて、音を音そのものとして、色を色そのものとして、聞いたり見たりするという、聴覚や視覚の場合には、いつでもそういうふうにあるわけにはゆかない在り方が、味覚では普通の在り方だということである⁽⁴⁹⁾」と述べる。つまり味覚とは、五感の中で、そうとは意識しなくとも「見える」視覚や「聞こえる」聴覚とは明らかに違う、ある意味、主観的な感覚であることを述べている。そして、以下のように続ける。

けれども、強調した物言いをするなら、食べ物そのものよりはその味覚的質、すなわち味だけを味わう欲求というものが別にあつて、この欲求を満たす時に生ずる美味しさというものがあり、これは空腹を背景にした美味しさの経験とは区別されなければならない。後者は食べることに伴う根本的な欲求充足の経験であり、極端に言うとも味という質の出現なしですら生じ得るのに、前者は様々な味覚的質がそれとして確認されることにおいてのみ語り得るのである⁽⁵⁰⁾。

ここで松永は、味覚を二種類に分け、空腹を満たすものと味わうもの、として区別している。

サヴァランは、上記のような生理学的な味覚上の味わいのさらに先に、会食者との楽しい時間や会話が不可欠な要素となる「食卓の快楽」を加えるのである。それは、彼自身の述べるように「個の保存」を目的とした「食べる快楽」とは別のものである。

このように視覚や聴覚とは明らかに異なる感覚としての味覚を五感としてその分類に入れるのであれば、ジェネジック *génésique* もその分類に加えるべきではないか、というのがサヴァランの主張である。味覚が舌という感覚器官を通して感じる感覚から、「食卓の快楽」までを含む感覚として位置付けられるのであれば、ジェネジック *génésique* もやはり生殖器官を通じた感覚から、多くの広がりを持つ感覚となる。サヴァランにおいては、味覚同様、もちろんジェネジック *génésique* においても快楽の別がある。「種の存続」という目的以外のジェネジック *génésique*

(48) 浦上祐子、前掲論文、p. 45.

(49) 松永澄夫、『「食を料理する」：哲学的考察』、東信堂、2003、p. 167.

(50) 松永澄夫、前掲書、p. 169.

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかにかに受け継がれたか

の例としてサヴァランは、ロマネスクな恋愛、コケットリーが生まれたことを述べ、さらにコケットリーについてフランス生粋のものであると説明を加えている⁽⁵¹⁾。1798年のアカデミーの辞書でコケットリーを引けば、「意図的に好かれようとしたり、魅了したり、誘惑したりするために用いられる方法や言葉⁽⁵²⁾」とあり、同1835年では、「好かれない、引き付けたい、誘いたいという欲望。特に、虚栄心から好かれようとする女性について言う⁽⁵³⁾」との記述が見られる。さらには、「また、その感情を実際に抱いているかどうかにかかわらず、好かれようとする意図で用いられる仕草や言葉⁽⁵⁴⁾」のように、意味の拡張が見られる。つまり、サヴァランは恋愛期間や恋愛の駆け引きまでもジェネジック *génésiq*ue として考えられることを述べている。

サヴァランによる「食卓の快楽」にとって、会食者と共に過ごす、会話をその中心とした愉快的な時間の流れは快楽の中に組み込む重要な要素であった。それと同様に、サヴァランのジェネジック *génésiq*ue とは、コケットリー、やはり仕草や言葉が重要な要素となる。

ブリヤ＝サヴァランの『味覚の生理学』につけた序文の中で、ロラン・バルトはこのように記している。「B=S [ブリヤ＝サヴァラン] の意図は明白である。第一等の肉体的快楽（たとえ検閲を受けているにせよ）と味覚（本書においてその擁護と顕揚をもくろんでいるところの感覚）とのあいだの換喩的交換をほのめかすこと、がそれである⁽⁵⁵⁾」。しかし、バルトはサヴァランの努力は虚しく、性的快楽とガストロノミーの間には類似がなく、決定的な相違があると締めくくる。食卓の快楽には、恍惚・忘我・エクスタシーが欠けており、持続があるのみと結論づけるのだ。サヴァラン自身がジェネジック *génésiq*ue を圧制的な感覚であり、味覚をジェネジックよりも慎ましく持続的であると定義づけているとはいえ、サヴァランにとってのジェネジック *génésiq*ue とはやはり、「長い食事」の中で描かれる「食卓の快楽」同様、ロマネスクな恋愛やコケットリーの持つ言葉や態度から派生する時間的な持続を含んだ概念であると考えられよう。サヴァランは、官能小説をものしていた⁽⁵⁶⁾。当時出版はされず、数編あった作品のほとんどを遺族が燃やしてしまったために、現存する作品は掌編ひとつのみであるが、サヴァラン自身のジェネジックに対する関心の深さを表す一つの例と考えられよう。

(51) 『美味礼讃』上巻, p. 53. (P. G., p. 41).

(52) *Le Dictionnaire de l'Académie française*. Cinquième Édition. T.1, 1798, COQUETTERIE. s. fém. « Manières ou paroles employées à dessein de plaire, d'attirer, d'engager »

(53) *Le Dictionnaire de l'Académie française*. Sixième Édition. T.1, 1835, COQUETTERIE. s. f. « Désir de plaire, d'attirer, d'engager. Il se dit surtout en parlant Des femmes qui cherchent à plaire par vanité. »

(54) *Le Dictionnaire de l'Académie française*. Sixième Édition. T.1, 1835, « Il se dit aussi Des manières, des paroles employées à dessein de plaire, soit qu'on éprouve ou qu'on n'éprouve pas le sentiment que l'on veut inspirer. »

(55) Roland Barthes, *Lecture de Brillat-Savarin*, Hermann, 1975. 邦訳は『ロラン・バルト〈味覚の生理学〉を読む』松島 征訳, みすず書房, 1985, p. 39-40. を参照した。

(56) *Le relais de Saint-Quantin, fragments du voyage à Arras*; 複数のヴァージョンがそれぞれ1926, 1947, 1950年に出版されている。(Dominique Saint-Pierre, *op. cit.*, tome II, p. 360).

『味覚の生理学』の中で、サヴァランは、味覚とジェネジック *génésique* を近づける。「食物一般について」という省察の中で、「魚食が原因で起こる生殖行為」について「刺激的」だと語ってみたり「トリュフのエロチックな効能」についてある夫人の証言を載せたりしている。そしてラヴァテールとガルを引き合いに出しながら、生まれながらにして食（と性）を享受することのできる人間（*gourmands par prédestination*）についても述べるのである⁽⁵⁷⁾。『味覚の生理学』においては、上記のように食が性に影響することを述べるだけでなく、極端な食が健康に影響すること（食べ過ぎ、肥満逃避）や、性の過剰が体に影響すること（消耗した友人）が語られている。ジェネジック *génésique* について頁を費やすことはなかったものの、サヴァランにとって、食、健康、性の関係性は一つの大きな問題意識であった。そしてサヴァランにおいては、そこに「休息」が挟み込まれる。サヴァランは、この作品にわざわざ「休息について」という省察を設けている。「人間は無限の活動力を享受するようにはできていない。（…）この活動力の継続時間は、それが感じさせる感覚の種類性質のいかんによって延びることもあるが、それが継続すると人間は必ず休息を願うようになる。休息はやがて眠りにつながり眠りは夢を産む⁽⁵⁸⁾」。それだけでなく、サヴァランが省察の最初に置いた「感覚について」においては、食－休息（睡眠）－性行為－休息というサイクルが明らかにされている⁽⁵⁹⁾。

IV. バルザックとジェネジック *génésique*

ではバルザックは、サヴァランの問題意識をどのように発展させたのか。先に述べたように、1839年のサヴァランの『味覚の生理学』の再版に際して、バルザックは、シャルパンティエから序を依頼されている。実際に使用された序とは別の、使用されなかった未完の序の草稿「ブリヤ＝サヴァランの余白に」« En marge de Brillat-Savarin » には、以下のように記されている⁽⁶⁰⁾。

ブリヤ＝サヴァランは、常に才気に富み、優美で、有益な作品によって、当時最も華々しく、そして最も正当な成功の一つを収めた。その主題は長い間軽視されていたものであった。彼の著書により、いくつかの重要な発見がもたらされた。まず第一に挙げるべきは、第六の感覚、すなわちジェネジック *génésique*（生殖感覚）の発見である。この感覚については、彼の前にスターンが熱心に主張していた。サヴァランは、第六の感覚の生理学も求めたが、この非常に繊細な内容のためか著作が不可能と思われ、それを諦めてしまった。とはいえ、この第六の感覚の及ぼす影響は彼の主題にとって極めて重要なものであることは確かだ⁽⁶¹⁾。

(57) 『美味礼讃』上巻, p. 208. (*P. G.*, p. 150).

(58) 『美味礼讃』上巻, p. 269. (*P. G.*, p. 192).

(59) 『美味礼讃』上巻, p. 60. (*P. G.*, p. 45).

(60) 註2 参照。

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかにか受け継がれたか

この考えは、バルザックが『結婚の生理学』を発表した1829年からすでに示されていた。

あらゆる男は、誰でも空腹と渴きを覚えるように生殖の欲求を感じる。けれども全部が全部恋人であり美食家であるようには運命づけられてはいないのだ。わが現代文明は、味覚というものが一つの学問であり、飲んだり食べたりする術は一部の特権的な人々のものでしかないことを証明した。一個の芸術と見なされた快楽は、今やそれを解明する生理学者を待ちのぞんでいる⁽⁶²⁾。

バルザックの『結婚の生理学』は、結婚生活を分析したものであり、中でも妻の姦淫・不貞についてのテーマを大きく扱っている。サヴァランがジェネジック *génésique* についてのより深い考察を「われわれの孫たちの考えにまかせること」にしたことに応えるかのように、バルザックは男女の性についての論を進めてゆく⁽⁶³⁾。そしてバルザックは、性を語るに際して食を登場させる。

人間はいつでもものを食べているが、恋愛においてその欲望は、食卓に関する場合ほどに持続的でも規則的でもないといったことを別にすれば、肉体的恋愛は空腹に良く似た欲求である⁽⁶⁴⁾。一片の黒パンと一瓶の水で、どんな人間の空腹もおさまる。けれどもわれわれの文明はガストロノミーを創始した。

恋愛にもそれなりに一切れのパンがある。しかし、恋愛にもわれわれがコケットリーと呼ぶ恋の手管があるにしても、この魅力ある言葉は、その学問が生まれたフランスにしか存在しないのだ。

ところで、旅行者がどんな未開の国に着いても、アルコール飲料とうまい食べ物を見つけた

(61) « En marge de Brillat-Savarin », *Œuvres complètes de M. de Balzac*, Tome XXVI, Les Bibliophilies de l'Originale, 1976, p. 101. « Brillat-Savarin a obtenu l'un des plus beaux et des plus légitimes succès de ce temps par une œuvre constamment spirituelle, élégante et instructive dont le sujet avait été longtemps dédaigné.

Nous devons à son livre plusieurs conquêtes importantes. En première ligne, il faut mettre celle du sixième sens, le sens génésique pour lequel, avant lui, Sterne avait tant plaide, et qui voudrait sa physiologie aussi, mais la matière est si délicate que l'ouvrage peut sembler impossible puisque cet auteur y a renoncé, quoique les effets de ce sixième sens appartiennent éminemment à son sujet. »

(62) 『バルザック全集 2 「結婚の生理学」』, p. 57. (C. H., t XI, p. 957-958). 味覚が学問であるという部分に関するサヴァランの影響が指摘されている。(C. H., t XI, p. 1813).

(63) Moise le Yaouanc は、« La “Physiologie du plaisir” selon la “Physiologie du mariage” », *L'année balzacienne*, 1969, p. 165-182. でバルザックの快楽の記述に関する様々な文学作品の影響を述べている。

(64) 『結婚の生理学』に1829年に足された、この肉体愛と食欲との比喩は、サヴァランの著作との関係が指摘されている。(C. H., t XI, p. 1801).

ように、人間というものは、自分の食べる料理を変えたいという天与の欲求にとりつかれているということに思いたるならば、すべて夫たるもの、身震いさせられるものがありはしないか。しかも、空腹は恋情ほど強烈なものではない。だが魂の気まぐれは、美食の気まぐれよりはるかにその数多く、はるかにいらだたく、その熱狂においていっそう手がこんでいる⁽⁶⁵⁾。

この前半部分は、『味覚の生理学』でサヴァランが述べた、味覚は持続的であるが、ジェネジックは圧制的であるとの言葉と重なり、さらにそれを広げた「食卓の快樂」とコケットリーを伴うジェネジックの快樂についても言及がなされている。しかし後半部分において、バルザックは、食べ物を変えたいという欲求と同じように肉体愛にも相手を変える欲求があるのだ、と加え、サヴァランの言説を広げてゆく。

1829年に書き加えられた考察5「予定された人々について」においては、妻を独身者に奪われる夫の立場についても考察が行われる。彼らは、(妻を奪われることを)「予定された人々」des *prédestinés* と呼ばれ、バルザックは、どのような夫が若い独身者に妻を奪われるのかを説明する。この *prédestinés* という言葉遣いに関しても、先に述べたサヴァランの「生まれながらにして食(と性)を享樂することのできる人間(生まれながらのくいしんぼう)」*gourmands par prédestination* を受けたものであることは明らかであろう⁽⁶⁶⁾。

バルザックは、このような「予定された人々」(*prédestinés*) への様々な形での賠償を提示する。いくつかの賠償例が挿話として差し込まれる。その一つに以下のものが挙げられる。

夫婦関係の不幸が美食家の頭上に落ちたと仮定しよう。当然のことながら、彼は自分の嗜好に慰めを求める。彼の快樂は、彼の存在の他の感性的特質に逃げ込むことで別な習慣をとる。あなたは別の感覚になれるのである。

あなたはある日、役所からの帰り道に、うまそうなものがいっぱい並んでいるシュヴェの店の飾り棚の前で長いこと立ち止まり、財布から出さねばならぬ百フランという大金と、ストラスブールのフォアグラのパテが約束している享樂の間を行ったり来たりした末、やっとの

(65) 『バルザック全集2「結婚の生理学」』, p. 42-43. (C. H., t. XI, p. 941).

(66) *Prédestination* の語は、元々は神学の語彙 (T. de Théologie) であり、アカデミーの辞書には「神の決定であり、神学者によれば、特定の人々が予め救われることが決定されたもの」とある。« Décret de Dieu, par lequel, suivant l'opinion de certains docteurs, il a réglé d'avance que tels hommes seront sauvés. » (*Le Dictionnaire de l'Académie française*. Sixième Édition. T.2, 1835, article « Prédestination ».) サヴァランはこの語に、当時は卑俗な言葉とされた *gourmand* を組み合わせ、容姿に現れ出る「生まれながらの食いしんぼう」を描写した。『味覚の生理学』の中で、サヴァランが好んで使用する、高尚な題材と卑属でくだけた調子との対照で滑稽さを出す、ビュルレスク文体によく使用される手法であるといえよう。

思いで帰宅する。戻ってみると驚いたことには食堂の卓の上に、例のパテが傲然とふんぞり返っているではないか。あなたは呆然とする⁽⁶⁷⁾。

上の話をバルザックは以下のように続ける。百フランのパテを買うような贅沢をする余裕はないのだと妻を諭す夫に対し、妻は部屋の隅にいる男（恋人）の兄がそれを送ってよこしたのだと答える。それに対し、夫が礼を言わないことをもって妻とその恋人は「あなたが賠償を嘉納したのだと察する」という挿話である⁽⁶⁸⁾。

ここで、バルザックはサヴァランの食と性の関係性をさらにおしすすめる。サヴァランは、グルマンは性を好む傾向にあるし、ある種の食は性を促進させる機能を持つことを述べた。このようにサヴァランにおいては、食と性の影響関係は述べられていたものの、性を食によって代替することについては述べられていない。

ところがバルザックは、ここで、食と性の快楽が代替可能であることを述べる。つまり、先の引用が示すように、「彼の快楽は、彼の存在の他の感性的特質に逃げ込むことで別な習慣をとる。あなたは別の感覚になれるのである」ということなのである。夫は妻の愛人からフォアグラのパテを受け取るにより、妻との快楽を少なくとも一時的には放棄する。ここでは、性と食の等価交換がいとも簡単に行われている。

先に見た、「ブリヤ＝サヴァランの余白に」« En marge de Brillat-Savarin »（「ブリヤ＝サヴァランと生殖における食事について」« Sur Brillat-Savarin et De l'alimentation dans la génération »）には、以下のような記述が見られる。

このように我々はブリヤ＝サヴァランによって、美しさや才能が食事、つまり内臓の管理に依存しているという格言が広まったことを感謝しなければならない。だが残念なるかな、彼は人間の心にとって残酷なるもの、すなわち、悲しみや苦しみ、そして我々を蝕み弱らせるすべてのものが、食事によって対抗できると公言することはしなかった。彼は時として、結果を前にして躊躇した⁽⁶⁹⁾。

(67) 『バルザック全集2「結婚の生理学」』, p. 251. (C. H., t. XI, p. 1180-1181).

(68) 『バルザック全集2「結婚の生理学」』, p. 251. (C. H., t. XI, p. 1181).

(69) « En marge de Brillat-Savarin », *Œuvres complètes de M. de Balzac*, Tome XXVI, Les Bibliophilies de l'Originale, 1976, p. 103. « Ainsi nous devons à Brillat-Savarin la popularisation de cet adage que la beauté comme le talent dépendent de la Diète, de l'entretien des tubes intérieurs. Hélas, il n'a pas osé proclamer un fait plus cruel encore pour l'âme humaine, c'est que le chagrin, les peines, tout ce qui nous ronge et nous mine, peut être combattu par l'alimentation. Il a reculé parfois devant les conséquences. » とはいえサヴァランは、自身の作った強壮薬の効果により、エレジーばかり書いていた詩人がロマンチックになり、平凡で不幸な結末に終わる小説を一つ書いた夫人の2作目は、はなやかな結婚で終わっていたとの逸話を載せている。

まさに、妻を寝取られるという苦しみを受けた夫は、フォアグラのパテによってたとえ一時的であったとしてもその痛みを埋め合わせることができたわけであるし、このような構図は、のちのバルザックの小説作品に受け継がれてゆくこととなる⁽⁷⁰⁾。

バルザックは、このように続ける。

だが、彼が多くの偉大なる精神を占める生殖という暗い洞窟に光を投げかけたことには、無限の感謝を捧げるべきである。彼がさらにその研究を発展させなかったのは残念なことだ⁽⁷¹⁾。

すでに指摘のされていることだが、バルザックがこの草稿や『近代興奮剂考』において、生まれてくる男女の性別やその数、国の盛衰は食べ物によっていると述べる時、そこにサヴァランの『味覚の生理学』の影響は否定できない。だが、サヴァランにおいては、一方向的であった食と性、食と健康（知性）、性と健康（消耗）の関係が、バルザックにおいて変化する。

たとえば、始終頭を使う仕事に精を出して、生命を脳髓の方に集中させてみたまえ。脳髓は力に満ち溢れ、虚弱な脳膜もたくましく拡がり、髄質も発達してくるだろう。その代わり頭脳から下はすっかりお留守になってしまうので、天才でも必ず病気になってしまう。この病気を近頃医学は冷感症と呼んでいる。反対に長椅子の足許で人生を送ってみたまえ。とびきり魅力的な女性たちが横たわる長椅子の足許で。次から次へと恋をしたまえ。間違いなく白痴坊主になれるから。そちらの方に励みすぎると知性の働きは止んでしまう⁽⁷²⁾。

さきに、サヴァランのジェネジックには「休息」が挟まれることを述べた。サヴァランは省察「消化について」において、「消化の始まったばかりの時は、知的作業に従事することは危険である。性的享楽に身をゆだねるのはなおさら危険である。パリの墓地に向かっていく流れは、毎年数百人の人々をそこに運んでいくが、それは食べた後に、いや往々にしてあまりにも食べすぎた後に、目を閉じ耳を塞ぐことのできなかった人ばかりである⁽⁷³⁾」と述べる。サヴァランにとっては、ジェネジックにせよ、食卓の快楽にせよ、「休息」つまり時間が大切な要素となる。一方、バルザックにおいては、この両者には休息が挟まれることはない。性と食に代替性、つまり等価

(70) 食と性の代替といった意味では、『従兄ボンス』が挙げられるかも知れない。

(71) « En marge de Brillat-Savarin », *Œuvres complètes de M. de Balzac*, Tome XXVI, Les Bibliophilies de l'Originale, 1976, p. 103. « Mais on doit lui savoir un gré infini d'avoir jeté une lueur dans la caverne obscure de la génération qui occupe tant de grands esprits, il est malheureux qu'il n'ait pas donné plus de développements à ses recherches. »

(72) 山田登世子訳、前掲書、p. 156. (C. H., t XII, p. 308).

(73) 『美味礼讃』上巻、p. 266. (P. G., p. 190).

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における食と性は、バルザックの初期作品にいかに関わりが深かったか

交換の価値をつけながらも、それは言い換えれば、一方が与えられれば、他方が脅かされるという構図にはかならない。そこには、長い朝食を許容し、休息の時間を持つことを許された18世紀的価値観と休息の時間が挟み込まれる余地なく社会が目まぐるしく移り変わった19世紀初頭という、両者の生きた社会の持つスピード感の差異が大きく関わっているのかも知れない。

おわりに

これまで見てきたように本稿で取り上げたバルザックの初期の数作は、ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』において検討が不十分と思われる項目について、バルザックがそれを発展させて著したということが可能であると考えられる。特にバルザックは、サヴァランが詳細に分析するに至らなかったジェネジックという概念を発展させた。しかしそれは、サヴァランが考える「食卓の快楽」と対になるような、ゆったりとした時間を基礎としたジェネジックではない。まさに山田登世子が「病める快楽」と呼んだ「近代の快楽」である⁽⁷⁴⁾。

バルザックは、1829年刊行の『結婚の生理学』の加筆に始まり、1835年のミショーによる人物辞典、また1839年に再販された『味覚の生理学』の序の執筆依頼に関連し完成した「近代興奮剂考」とその序の執筆、というように、サヴァランの著作を幾度となく読み返したに違いない。つまりバルザックは、本人が望んだかどうかはともかくとして、サヴァランの著作を消化し発展させるための機会を幾度も得ている。

そのような文脈で捉えたときに、一度はバルザックの全集に収められたがバルザックが書いたとは確定していない⁽⁷⁵⁾「ガストロノミックな生理学」*« Physiologie gastronomique »* (1830)についても、そこで扱われる食のテーマは、『味覚の生理学』でサヴァランが書ききれなかった内容を補完していこうというバルザックの試みにすら感じられる。「ガストロノミックな生理学」は、サヴァランとバルザックが共に好んだラヴァターやガルの記述から始まり、「40年間、食事の場を観察してきた⁽⁷⁶⁾」と、サヴァランを思わせる筆者を登場させる。サヴァランがラヴァターやガルの理論を用いて記述したグルマン（食いしん坊）の描写に付け加えるかのように、グルトン（貪るように食うもの）とマンジュール（ただ食べる人）の詳細な描写を行うのである。この作品におけるバルザックの文体は、同時期の他の作品に見られるような軽やかさは見られず、サヴァランの文体のパステイッシュのようにも思われる。

仮に、この作品がバルザックの手によるものでなかったとしても、19世紀において食と性を文

(74) 山田登世子訳、前掲書、p. 218. 山田は、こう述べる。「ブリヤ＝サヴァランは永遠の美味を楽しく語り聞かせてくれる。ところがバルザックは近代の快楽を論じて警鐘を打ち鳴らすのである」。

(75) *Dictionnaire Balzac*, sous la direction d'Éric Bordas [et al.], Classiques Garnier, Paris, 2021, article « Physiologie gastronomique », p. 1013.

(76) « Physiologie gastronomique », *Œuvres complètes de H. de Balzac*, Michel Lévy frères, Paris, 1870, t. XIV, p. 471-475.

学作品の中で語る上で『味覚の生理学』が果たした役割は大きいといえるだろう。本論においてはバルザックの初期の小説以外の作品に分析の対象を絞ったが、今後は、バルザックの小説作品と『味覚の生理学』との関係についても検討し、ゆくゆくは19世紀前半のその他の作家の小説作品におけるサヴァランの影響についても分析を進めたい。